

「書物の書物」と Nether Stowey の月

— Coleridge の想像力について (1) —

宮本 なほ子

1

Biographia Literaria の第十三章 “On the imagination, or esemplastic power” は、第一巻の哲学的論考を締め括るために、第一巻の最終章という重要な位置を与えられているのだが、この部分には、想像力を巡る大変興味深い考察とともに、ロマン派特有の「未完」と「断片化」という問題が、きわめて Coleridge 的な形で露呈している。友人からの手紙(実は Coleridge 自身が自分宛てに書いた偽の手紙)が章の真ん中に差し挟まれて、十分に展開されるはずの想像力論は腰砕けになってしまっているのである。架空の手紙というある意味では文学的常套手段は、ここでは、ゴシック小説に見られる周到な入れ子細工の仕掛けとして使われているわけではないし、まして、読者の期待をはぐらかす bathos の効果をねらったものではない。この手紙にあるのは、Coleridge 特有の先延ばしと *Conversation Poems* に明らかな彼の “vicariousness” との密接な絡み合いなのである。

Coleridge の “vicariousness” を知っている私たちは、まだ書かれていない壮大な想像力論をすでに読んでその価値を十分に評価している架空の友人という設定に彼の内的希求の切実さを感じるとともに、彼の壮大な *Opus Maximum* が決して書かれることはないだろうと確信する。およそ百ページになる本来の第十三章の代わりに私たちが目にする第十三章は、“*the fragments of the winding steps of an old ruined tower*”(BL, p.303) のさらにまた断片でしかないのである。このように創造の作業を復元の作業に摺り替えたところで創作に伴う困難が減るわけもなく、Coleridge は、本来の論考を無限に先延ばしにせざるをえないのである。¹⁾

しかし、この偽の手紙において、「未完」、「断片化」の問題と同様に興味深いことは、ここに見られるいかにも Coleridge らしい倒錯した仮託行為の中で、彼の詩的想像力の全盛期と同様の非常に美しいヴィジョンが

描かれていることである。Coleridge は架空の友人にその哲学的論考が彼の感情に与えた効果について語らせるのだが、それは、月光の下で起こるエピソード的な光景として視覚化される。彼は、まるで、初めてただ一人、風吹き荒ぶ秋の月夜の晩にゴシック建築の寺院に置き去りにされたかのように感じ、光と影の交錯する中、

often in palpable darkness not without a chilly sensation of terror; then suddenly emerging into broad yet visionary lights with coloured shadows, of fantastic shapes yet all decked with holy insignia and mystic symbols; and ever and anon coming out full upon pictures and stone-work images of great men, with whose names I was familiar, but which looked upon me with countenances and an expression, the most dissimilar to all I had been in the habit of connecting with those names. Those whom I had been taught to venerate as almost super-human in magnitude of intellect, I found perched in little fret-work niches, as grotesque dwarfs; while the grotesques, in my hitherto belief, stood guarding the high altar with all the characters of Apotheosis. (BL, p.301)

幻視的な月光を浴びて、壁に嵌め込まれた哲学者たちの像とそれを飾る神秘的な文字は、全く見知らぬ姿をとって立ち現われる。そして、imagination の力によって、

what I had supposed substances were thinned away into shadows, while every where shadows were deepened into substances. (BL, p.301)

Yeats は、星明かりあるいは月明かりの夜、“*Shade more than man, more image than a shade*” (“*Byzantium*,” 1.10)²⁾を見た。それと同様に詩的でサブライムな光景がここに現出している。Coleridge (の架空の友人) がここで見ているのは、哲学が詩に変貌する希有の一瞬であり、この一

節は彼の“‘moon-visionary’ idea”⁹⁾が、十分に説明され尽くしている箇所であると同時に、1817年という彼の詩神が去って久しい時期に、このようなヴィジョンにふさわしい詩的言語を駆使しえた例外的な例ということになるだろう。

Coleridgeにこのような幻視的想像力を発動させたのは、この一節の次に彼がこの効果を“To William Wordsworth”の引用によって説明しようとしていることからわかるように、Wordsworthの*The Prelude*である。Coleridge(の架空の友人)は次のように言う。

Yet after all, I could not but repeat from a MS. poem of your own in the FRIEND, and applied to a work of Mr.

Wordsworth's though with a few of the words altered:

— An orphic tale indeed,

A tale *obscure* of high and passionate thoughts

To a *strange* music chanted! (*BL*, p.302)

引用は“To William Wordsworth”の45行目から47行目なのだが、オリジナルの“A song divine”(l.46)を“A tale *obscure*”に、“To their own music”(l.47)を“To a *strange* music”に変え、“obscure”と“strange”をイタリックにしていることと、先の美しいヴィジョンの用語と内容から考えて、Coleridgeがここで思い浮べているのは、*The Prelude*(1805)の第五巻の終わり近くの一節であると考えられる。

Visionary power

Attends upon the motions of the winds
Embodied in the mystery of words;
There darkness makes abode, and all the host
Of shadowy things do work their changes there
As in a mansion like their proper home.
Even forms and substances are circumfused
By that transparent veil with light divine,
And through the turnings intricate of verse
Present themselves as objects recognised
In flashes, and with a glory scarce their own.

(V, ll.619-629)

この部分は、“Here must I pause: this only will I add / From heart-experience”(ll.608-609)で始まり、Wordsworthが“Books”についての詩を書くことに行き詰まって、その代わりに、“works / Of mighty poets”(ll.618-619)から受け

取れる“deep joy”(l.617)について語ったところである。この状況設定は、まだ構想中の想像力論をWordsworthの詩の効果で説明しようとしたColeridgeの手紙と大変よく似ている。だが、力強い詩人Wordsworthに仮託して想像力を語ろうとするColeridgeと異なり、Wordsworthはきわめて暴力的なやり方で想像力に対する期待を実現してしまう。1804年3月に現在形で書かれた第五巻の末尾の詩行にこめられた“Visionary power”に対する期待は、第六巻で1790年8月のAlps登山を語っている最中に、narrativeの流れを破り、クロノロジカル・オーダーを乱していきなり1804年3月の現在が割り込んでimaginationを称揚する529行目以下で実現するのである。

I was lost as in a cloud,

Halted without a struggle to break through,

And now, recovering, to my soul I say

'I recognize thy glory'. In such strength

Of usurpation, in such visitings

Of awful promise, when the light of sense

Goes out in flashes that have shewn to us

The invisible world, doth greatness make abode.

(VI, ll.529-536)

月の光と幻視的想像力を結びつけること。John Beerは、“It is interesting that both Coleridge and Wordsworth use this image of the moon to describe the visionary”と言う。¹⁰⁾ Wordsworthはそれを“usurpation”に結びつけ、その一方、Coleridgeは“received / The light reflected, as a light bestowed”(“To William Wordsworth,” ll.18-19)という痛切な認識へ至る。¹¹⁾ だが、二人は、各々独自に「月光の幻視者」という詩的概念を発展させていったのではなく、複雑な相互の影響関係の中で、この概念を詩的实践に結びつけていったのである。¹²⁾ 月光の扱い方において、ColeridgeとWordsworthの共通点と相違点が最も顕在化する。そして、それは、彼らの「共生」的な相互依存関係を抜きにしては語れないものである。¹³⁾ 先に述べたように、*Biographia*の第十三章の手紙の背後には、“To William Wordsworth”を介して*The Prelude*が存在している。また、逆に、*The Prelude*に触発された“To William Wordsworth”の月と海が創り出す美しいヴィジョン(“a tranquil sea, / Outspread and bright, yet swelling to the moon”(ll.100-101))を含む一節が、*The Prelude*のSnowdon登山のエピソードの改訂に重要な影響を与えたことは、Jonathan Aracの精緻な読みが明らかにしている通りである。¹⁴⁾

前置きが長くなったが、以下の部分では、ColeridgeとWordsworthにおいて、月と詩的想像力がいかに結びついていくかをColeridgeの側から考えてみたいと思う。

さらに、もう一言だけ言い添えておくと、「月光の幻視者」という概念は、ロマン派一般の共有財産ではあるが、その重要性は、WordsworthとColeridgeの場合と、KeatsとShelleyの場合では明らかに異なる。KeatsもShelleyも、基本的には、詩的根源を太陽神Apolloに置く。Keatsの初期の*Endymion*は月の女神Cynthiaを求める探求詩であるが、彼の重要な詩的探求の主人公となるのは、*Hyperion*と*The Fall of Hyperion*の太陽神Apolloである。Shelleyの場合も同様である。WordsworthとColeridgeの影響の色濃い初期の*Alastor*では、主人公の詩人は、放浪の途中、冒頭に引用した*Biographia*の手紙の場面とよく似たエピソード的な光景を目撃する。石像の立ち並ぶ古の廃墟を彼は彷徨い歩き、“speechless shapes”(l.123)を終日凝視し、“the moon / Filled the mysterious halls with floating shades”(ll.123-124)した時、

his vacant mind
Flashed like strong inspiration, and he saw
The thrilling secrets of the birth of time. (ll.126-128)⁹⁾

しかし、この体験は作中の詩人にとって啓示の瞬間とはならず、彼は放浪の旅を続ける(ヴェールの乙女のヴィジョンが現われるのは、149行目以降である)。そして、*Prometheus Unbound*以後、Shelleyの重要な詩女神は、太陽神の娘という設定がなされるのである。¹⁰⁾ロマン派第二世代とは異なり、WordsworthとColeridgeは終生「月光の幻視者」という二人の共有財産をあたため、発展させていった。その経緯と意味を考えることが本論の目的である。

2

Coleridgeにおける月と想像力の結びつきを考える際に一つの重要な鍵になるのは、月と太陽の関係である。

すぐに思い浮かぶのは、*The Ancient Mariner*とRobert Penn Warrenのこの作品についての論文であろう。¹¹⁾海蛇の祝福の場面を中心に展開される月=想像力/善、太陽=悪というWarrenのいささか明快すぎる分類に対して様々な議論がなされてきたが、¹²⁾ここでは、海蛇の場面で月が果たしていたのと同様の役割をColeridge初期の詩では太陽が果たしていたことを手がかりにして、月

と太陽の関係を考えてみたい。

“Religious Musings”(1794-96)の最後の所で、Coleridgeは“omnipresent Love”(l.415)を太陽に喩え、次のように述べている。

As the great Sun, when he his influence
Sheds on the frost-bound waters — The glad stream
Flows to the ray and warbles as it flows. (ll.417-419)

太陽と神が重ね合わされているのは明らかであるが、興味深いのは、“warbles”と“flows”というMiltonのエコーを響かせる言葉使いによって、¹³⁾海とまるで鳥のように自然に歌を奏でる詩人が暗喩の糸で結ばれ、太陽と海の照応が、詩人の声=鳥の歌声を生み出していることである。¹⁴⁾初期においては、詩人の声、想像力の起源は太陽に重ね合わされているのだ。

ほぼ同じ時期のWordsworthも、詩的想像力の発動は昇る太陽による。*Descriptive Sketches*(1792年夏執筆、1793年出版)では、

'Tis morn: with gold the verdant mountain glows,
More high, the snowy peaks with hues of rose.
A mighty waste of mist the valley fills,
A solemn sea! whose vales and mountains round
Stand motionless, to awful silence bound.
A gulf of gloomy blue, that opens wide
And bottomless, divides the midway tide.
Like leaning masts of stranded ships appear
The pines that near the coast their summits rear;
Bounds calm and clear the chaos still and hoar;
Loud through that midway gulf ascending, sound
Unnumbered stream with hollow roar profound.
(ll.492-505)

いかにも18世紀Picturesque的な言葉使いは、1850年版の詩集ではかなり改められているのだが、¹⁵⁾重要なのは、Norton版の*The Prelude*の註にある通り、朝日という一点を除いてこの描写の細部は、Snowdonエピソードとぴったり重なるという点である。¹⁶⁾Wordsworthにおいても初期には太陽と詩の起源は同一視されており、後に(Coleridgeとの出会い以後に)太陽の果たす役割は月が果たすことになるのである。

“Religious Musings”と*Descriptive Sketches*との影響関係を特定することは困難である。執筆年代から考えて、

WordsworthがColeridgeに影響を与えたのかもしれないし、そうではないのかもしれない。両方の作品の太陽を比べると、Wordsworthでは現実の風景、つまり、現実の朝日が詩人の内にある想像力と呼応するのに対して、Coleridgeでは“as”の節の中にあることからわかるように、“the great Sun”は「神」の比喩として詩人のヴィジョンの中で夢想されており、現実の太陽からは一步後退している点が大きく違う。しかし、太陽の帯びる象徴的な意味は同じであり、伝統的な使い方の枠内にある。

では何故 *The Ancient Mariner* で月と太陽の役割が逆転してしまうのか。1795年 Wordsworthと Coleridgeは初めて出会い、以後新しい詩のあり方を二人で模索していくことになる。彼らが求めたのは、poetic dictionに雁字搦めになった伝統的な詩と訣別した“A different lore”(“The Nightingale: A Conversation Poem, April, 1798,” 1.41)であり、その時、Nether Stoweyの月夜が彼らに新しい方向を示唆したことは疑いえない。Coleridgeは“The Nightingale”で月光の下、陽気なナイチンゲールの声が森を一つの巨大な Eolian harp に変えるのを目撃した。また、Wordsworthは“A Night Piece”(1798)で自己の体験に基づいて月の光が引き起こす天地の照応の現場に旅人を立ち合わせた。⁽⁴⁷⁾Beerは、“The Rime of the Ancient Mariner”(1797-98年執筆)においても、つまり大航海時代の老水夫の冒険譚を語る古色蒼然たるバラッドの中にも、その擬古体にもかかわらず、“We are...less aware of the mariner-narrator than of Coleridge himself walking on the Quantocks... or of Dorothy listening to the sounds of unseen birds in a mist or of the youthful Wordsworth hearing a flute played in a lonely place by a school-friend”⁽⁴⁸⁾という箇所があると言う。では、月光が重要な役割を果たす海蛇の祝福の場面ではどうだろうか。

老水夫が海蛇を祝福し、彼にかかった呪いが解けるに先立って月光に輝く海と海蛇は入念に描写される。まず、月が昇る。

The moving Moon went up the sky
And no where did abide:
Softly she was going up
And a star or two beside — (ll.255 - 258)

月光は海に不思議な力を働かせ(“The charmed water”(1.262))、霜を降らせたかのように海を白銀に輝かせる一方、船影の落ちるところでは赤く燃え立たせる。

Her beams bemock'd the sultry main
Like morning frosts yspread;
But where the ship's huge shadow lay,
The charmed water burnt alway
A still and awful red. (ll.259 - 263)

「朝の霜」がしきつめられたように輝く海は、“Religious Musings”の“the frost-bound waters”とは違って肯定的な霜のイメージを作り出している。月と白銀の霜の親密な関係は、ColeridgeとWordsworth兄妹がNether Stoweyの自然の中に見出したものであったし、⁽⁴⁹⁾Coleridgeは“Frost at Midnight”(1798)を次のような美しいイメージで締め括っている。

the secret ministry of frost
shall hang them up on silent icicles,
Quietly shining to the quiet Moon. (ll.72 - 74)

“morning frosts”は1800年以降“April hoar-frost”と書き改められ、生の胎動を感じさせる「四月」と冷たい銀色の霜が奇妙に美しい対照性を残しながら調和し、その肯定的なイメージをさらにはっきりさせる。このスタンザの“strangely and powerfully suggestive”⁽⁵⁰⁾な美しさを作り出している赤と白のシンメトリーは続く二つのスタンザで大々的に展開される。

Beyond the shadow of the ship
I watch'd the water-snakes:
They mov'd in tracks of shining white;
And when they rear'd, the elfish light
Fell off in hoary flakes.

Within the shadow of the ship
I watch'd their rich attire:
Blue, glossy green, and velvet black
They coil'd and swam; and every track
Was a flash of golden fire. (ll.264 - 273)

船影の向こうに見える白く輝く海蛇が引く航跡と彼らからこぼれ落ちる“elfish light”は、後にWordsworthの*The Prelude*のボート盗みのエピソードにそと取り入れられることになるのだが、⁽⁵¹⁾地上に超越的瞬間が実現する印となる。この白い輝きに対して、船影の赤く燃え立つ海では、海蛇はあらゆる色を煌めかせ、その水脈

は金色に輝く。この白と豊かな色合いの対比は、Shelleyであれば“the white radiance of Eternity”と生の“a dome of many-coloured glass”の多色の燦めき (“Adonais,” 1.463, 1.462)と表現した天上の光と地上の光の対比である。そして、Shelleyにおいては両立が困難であったこの二種類の光が、Coleridgeにおいては月の下で (“sublunary”で)海蛇という地上の生物において同時に実現していることは強調されてよい。このような至福の瞬間を実現するために象徴的な意味を帯びて月の光が選びだされているのである。

John Livingston Lowesの浩瀚な *The Road to Xanadu* は、この箇所についても夥しい「原典」を挙げているが、その中で月と太陽の関係の点から特に興味深いのは、Frederick Martensの *Voyage into Spitzbergen and Greenland* の ‘Sea-bow’ の記述と Manchester Transactions の中の John Haygarth による ‘glory’ の記述である。Martensによると ‘Sea-bow’ が見えるのは、

the Rime fell down in the shape of small *Needles of Snow* into the Sea, and covered it as if it was sprinkled all over with Dust....[T]he Sea seemed covered by them, as with a Skin, or a tender Ice....This hapneth in clear Sun-shine and intense cold weather, and it falleth down as the Dew doth with us at Night invisibly in dull weather....[I]t sparkles as bright as Diamonds; shews like the Atoms in Sun-shine.⁽²²⁾

Commonly we see this [Bow] before the Ship, and sometimes also behind to the Lee-ward... over-against the Sun, where *the Shadow of the Sail* falleth. It is not *the Shadow of the Sail*, but a Bow sheweth itself in *the Shadow of the Sail*. We see this pleasant reflexion, in the small drops of the Salt-water of several colours, like the Rainbows in the Skies.⁽²³⁾

霜をしきつめた海で多色に燦めく海蛇は、この ‘Sea-bow’ に対応するが、この現象を引き起こしている太陽は Coleridge の詩においては月に変えられている。

陸上で ‘Sea-bow’ のような現象が起こる場合、それは ‘glory’ と呼ばれており、Coleridge がこの現象に並々ならぬ関心を抱いていたことは、彼の Notebook に “Description of a Glory by John Haygarth” についての感想が現われることに窺われる。Haygarth によると、

...the sun shining on a surface of snow covered with a

hoar-frost, exhibits... beautiful brilliant points of various colours, as, *red, green, blue*, etc., reflected and refracted at different angles.⁽²⁴⁾

Coleridge は 1798 年の 4 月 20 日から 5 月 22 日にかけて Manchester Transactions の第二巻を Bristol Library から借りだしている。Notebook の “Description of a Glory by John Haygarth” の項には Coleridge 自身が 1780 年にこの現象を実際見たことが書かれ、‘glory’ の美しさについての次のような記述で結ばれる。

the beautiful colors of the hoar frost on snow in sunshine — red, green, and blue, in various angles.⁽²⁵⁾

読書の記憶は彼自身の体験の記憶と複雑に絡み合いながら、海蛇の祝福のヴィジョンを生み出す用意をする。しかし、‘Sea-bow’、あるいは、‘glory’ という不思議な自然現象を引き起こす現実の太陽と等価の力を彼は自らの心の中に見出さなければならない。そして、彼はその力 (= 想像力) に筆の力で形象を与えなければならない。その時彼は、現実の太陽の代わりに用いられるメタフォリックな太陽を使おうとはしない。すでに使い古された貨幣のようにになっている太陽のメタファーでは ‘glory’ を引き起こす現実の太陽に対抗できないから。⁽²⁶⁾ だから、Coleridge は、代わりに月という新しい比喩を採用し、太陽ではなく月の力によって紙面の上で ‘glory’ を実現させるのである。

John Livingston Lowes は、さながら交唱聖歌のようなこの二つのスタンザの “exquisite structural balance” について次のように述べている。

The magical symmetry of the pair of stanzas unfolds from the initial concept of the ship’s huge shadow with the inevitableness of a leaf expanding from a bud. Somehow, upon the chaos of images thronged up from their sleep, a luminous unity has been imposed.⁽²⁷⁾

The Road to Xanadu で綿密に行なわれる詩の一語一語の背後にある原典調査から、このようなコメント——フーコーが「幻想の図書館」と呼んだ書物とランプの間で育まれる醒めた幻想の様式⁽²⁸⁾についての考察ではなく、Keats の “if Poetry comes not as naturally as the Leaves to a tree it had better not come at all”⁽²⁹⁾ という発言を思い起させるコメント——が引き出されるのを見ると、私たちは、Lowes

が Romantic ideology に絡めとられている⁶⁰⁾ということよりもむしろ、Coleridge において「書物の書物」を書く夢想がいかにロマン派的な想像力と分かちがたく結びついているか知ることになるのではないか。本のページの間から詩人の(無)意識へこぼれ落ちた種々雑多なイメージは、テキストとテキストの間で植物のように増殖する。だから、ここに現実の入り込む余地はないように見えるのだが、しかし、Coleridge においては、その絶え間のない増殖には、“a luminous unity” が課されるのである。Beer の言うように擬古体にもかかわらず我知らず入るロマンティックな抒情の声によって、また、この詩が彼の想像力が命ずるがままに太陽を月にすり替え “Poem of pure imagination”⁶¹⁾ になろうとすることによって。彼と Wordsworth 兄妹が呼吸した Quantocks の風景から彼の想像力は、太陽と同等な力を獲得し、その象徴として、月というエンブレムを選び取る。ここにおいて、月と太陽の象徴的な価値は逆転し始めることになるのだ。

註

Coleridge の詩作品の引用は、*The Ancient Mariner* を除き H.J. Jackson ed., *The Oxford Authors: Samuel Taylor Coleridge* (Oxford, 1985) に拠る。*The Ancient Mariner* については、R.L. Brett and A.R. Jones eds., *Wordsworth & Coleridge: Lyrical Ballads* (Methuen, 1963) から引用し、特に 1798 年版について言及する際は “The Rime of the Ancient Mariner”、幾度かの改訂版を含めてこの作品について述べる場合は *The Ancient Mariner* と表記する。Coleridge の散文作品については、*Biographia Literaria* は、James Engell and W. Jackson Bate, eds., *Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, vol.7 (Princeton, 1983. 以下 BL と略記)、書簡は、Earl Leslie Griggs ed., *Collected Letters* 6 vols. (Oxford, 1956-71)、Notebooks は、Kathleen Coburn ed., *Notebooks* 4 vols. (Princeton, 1957-) を使用。

Wordsworth の *The Prelude* については、Jonathan Wordsworth, M.H. Abrams, and Stephen Gill, eds., *A Norton Critical Edition: The Prelude 1799, 1805, 1850* (Norton, 1979)、その他の詩作品については、John O. Hayden ed., *Penguin English Poets: Wordsworth*, 2 vols. (Penguin, 1977) に拠る。

- (1) 第 13 章に差し挟まれた偽手紙が議論を無限に遅延させ語りを屈折させてしまう事情に関しては、Gayatri Spivak, “The Letter as Cutting Edge,” in *Yale French Studies*, 55-56 (1977), pp.108-26.

- (2) W.B. Yeats, *The Poems: A New Edition*, Richard J. Finneran ed., (Macmillan, 1983), p.248.
- (3) J.B. Beer, *Coleridge: The Visionary* (Greenwood Press, 1959), p.94.
- (4) Ibid., p.93.
- (5) もちろんこの詩句は Coleridge が Wordsworth について述べたものだが、このことがあてはまるのは Coleridge 自身である。
- (6) Wordsworth と Coleridge の詩作品の複雑な影響関係については、Lucy Newlyn, *Coleridge, Wordsworth, and the Language of Allusion* (Oxford, 1986).
- (7) 例えば、Thomas McFarland, “The Symbiosis of Coleridge and Wordsworth” in *Romanticism and the Forms of Ruin* (Princeton, 1981), pp.56-103 を参照。
- (8) Jonathan Arac, “Coleridge and New Criticism” in *Critical Genealogies: Historical Situations for Post-modern Literary Studies* (Columbia University Press, 1989), pp.89-91.
- (9) P.B. Shelley, *A Norton Critical Edition: Shelley's Poetry and Prose*, Donald H. Reiman and Sharon B. Powers eds., (Norton, 1977), p.73. Shelley の詩作品の引用はこの版に拠る。
- (10) 例えば、Asia は 2 幕 5 場の有名な “Life of Life” の歌のところで暁の太陽に喩えられるし、The Witch of Atlas は Apollo の娘、*The Triumph of Life* の “shape all light” は水に映る太陽から生まれる。
- (11) Robert Penn Warren, “A Poem of Pure Imagination: An Experiment in Reading” (1945-46) in *Selected Essays* (Random House, 1951), pp.198-305.
- (12) 例えば、Humphry House, *Coleridge: The Clark Lecture 1951-52* (Rupert Hart-Davis, 1953), p.103. Beer, pp.159-160. Edward E. Bostetter, “The Nightmare World of *The Ancient Mariner*,” in *Twentieth Century Views: Coleridge*, Kathleen Coburn ed., (Prentice-Hall, 1967), pp.65-77.
- (13) “sweetest Shakespeare fancy's child, / Warble his native wood-notes wild” (“L'Allegro,” ll.133-134), “Thy [Shakespeare's] easy numbers flow,” (“On Shakespeare,” l.10) in *Milton: Complete Shorter Poems*, John Carey ed., (Longman, 1968), p.138, p.123.
- (14) ここに見られる太陽、海、鳥の象徴的な関係は、この部分をモデルにした Shelley の *The Triumph of Life* の冒頭でさらにわかりやすく展開されることになる。まず、太陽が昇る。

Swift as a spirit hastening to his task
 Of glory and of good, the Sun sprang forth
 Rejoicing in his splendour. (ll.1-3)

そして、この太陽に森羅万象が祈りにも似た音楽を捧げる。Shelleyは、まず、昇る太陽に海の祈りの声を、次に、海の祈りに鳥たちの朝の歌を呼応させる。

The smokeless altars of the mountain snows
 Flamed above crimson clouds, and at the birth
 Of light, the Ocean's orison arose
 To which the birds tempered their matin lay.

(ll.5-8)

言うまでもなく、Shelleyの性急なテルツァ・リーマはColeridgeのゆったりしたリズムとは大分違うし、このすぐ後で、Shelleyは、太陽=父=神の光を別の光で消してしまうことになる。

- (15) 1850年版では以下のように書き改められる。

'Tis morn: with gold the verdant mountain glows;
 More high, the snowy peaks with hues of rose.
 Far-stretched beneath the many-tinted hills,
 A mighty waste of mist the valley fills,
 A solemn sea! whose billows wide around
 Stand motionless, to awful silence bound:
 Pines, on the coast, through mist their tops uprear,
 That like to leaning masts of stranded ships appear.
 A single chasm, a gulf of gloomy blue,
 Gapes in the centre of the sea — and, through
 That dark mysterious gulf ascending, sound
 Innumerable streams with roar profound.

(ll.405-416)

- (16) Norton *Prelude*, p.460.
 (17) この旅人の体験がWordsworth自身のものであったことは、I.F.noteとDorothyの1798年1月25日の日記によって裏付けられる。
 (18) Beer, *Coleridge's Poetic Intelligence* (Macmillan, 1977), p.174.
 (19) House, p.102.
 (20) John Livingston Lowes, *The Road to Xanadu: A Study in the Ways of the Imagination*, Second Revised Edition, (Constable, 1951), p.64.

- (21) The moon was up, the lake was shining clear
 Among the hoary mountains. . . .

Nor without the voice

Of mountain-echoes did my boat move on
 Leaving behind her still on either side
 Small circles glittering idly in the moon,
 Until they melted all into one track
 Of sparkling light. (I, ll.383-94)

- (22) Lowes, p.68.

- (23) Ibid., p.70.

- (24) Ibid., p.205.

- (25) *Notebook*, I, 258.

- (26) Aristotleのメタファー論以来の太陽という起源が支配するミメシスの原理から逃れるために後世の哲学者、詩人がいかに格闘したかについては、Jacque Derridaの“White Mythology” in *Margins of Philosophy* (Paris, 1972, trans. Chicago, 1982), pp.209-271.あるいは、これを下敷きにしたJ. Hillis Millerの“Impossible Metaphor: Steven's 'The Red Fern' as Example” in *Yale French Studies* 69 (1985), pp.150-162.ただし、Coleridgeの月という新しいメタファーを持ち出し不在の太陽に代えるという詩学は、上記の論文で扱われる文学者たちのやり方とは、必ずしも同列に論じられないものである。

- (27) Lowes, p.64.

- (28) Michel Foucault, “Un <fantastique> de bibliothèque” in *Cahiers Renaud-Barrault: FLAUBERT et la Tentation de Saint Antoine*, No. 59, Mars 1967, Gallimard. 『幻想の図書館』、工藤庸子訳、哲学書房、1991。pp.18-20.

- (29) John Keats, *Letters of John Keats*, Robert Gittings ed., (Oxford, 1970), p.70.

- (30) Christopher Norris, “Forked paths to Xanadu: parables of reading in Livingston Lowes” in *The Deconstructive Turn: Essays in the Rhetoric of Philosophy* (1983, rept. Routledge 1989), pp.128-143.

- (31) Coleridgeは*Table Talk*の中で、Mrs Barbauldの*The Ancient Mariner*に対する非難に対して、“a work of such pure imagination”は、“ought to have had no more moral than the *Arabian Nights*' tale of the merchant's”と述べる。*The Table Talk and Omniana*, Coventry Patmore ed., (Oxford, 1917), p.106. Warrenのエッセイのタイトルはここから取られている。